

キェルケゴールの人間の概念

恐怖と不安の区別の意義について

中 村 幸 平

目 次

1. 恐怖と不安の心理学的考察
2. 恐怖と不安の実存的意義
(但し以下の各節は次の機会にゆずる)
3. 恐怖と不安の人間概念との関係
4. 恐怖と不安のサルトルとの比較
5. 恐怖と不安の区別

キェルケゴールの不安と恐怖の区別は、人間の現実をロゴスの客体的なものと、パトス¹⁾ 的主体的なものとの関係において捉え、さらにパトスの意識の中から段階を異にする二種類の感情をあげて、そこから人間を微視的に、超越の自由の可能性について解明する設定のひとつと考えることが許されると思う。その二つの重点は、(1)恐怖とことなり不安は時間的で対象がなく、無にかかわることからそれと形態心理学的な無、サルトルの人間が分泌するという無、ヘーゲルの絶対無、ニーチエのいう無、および近代的ニヒリズムの無、との関連を見透すことによって本来の宗教的実存の現実的把握をこころみること。(2)一義的な恐怖とことなって、不安は両義的であり、それを前項の無にもとずいてそこに成立する自由、主体性の逆説的な肯定に通ずる両義性として恐怖の一義性と区別することにある。

ところで恐怖と不安がその区別によって実存を示すものであると共に、それらが極めて近接した感情であることは、そのままその区別が無視され、不安が恐怖に置き換えられる日常性を暗示するものとなっている。

しかしまた、ニーチエが **ressentiment** にかえて権力意志、あるいは距離の

パトスを説き、それをとりあげた M・シェラー²⁾ はキリスト教においては **ressentiment** を否定し、社会主義運動にはそれをみとめたのであるが、これは主権者を相手とする恐怖に基く後者を、そのような対象のない不安に基く前者と区別した一例とみることができるのである。事実それは支配階級の特権保護の企画でもないし、それを倒すために奴隷の作った策謀でもない。

実存主義哲学と呼ばれるものの中には、資本主義社会の末期的愁訴³⁾、日和見的ブルジョアジーの背景とみられるものもあって、そこでは不安は恐怖とみられ、他面にはおもにそのように評するマルキシズムの世界における労働⁴⁾にもその二重性⁵⁾をみのがすことも出来ず、その公式化した原理を本来のものにするには、恐怖から不安をわける実存的思考を無視することはできないと思われる。

歴史的には不安⁶⁾は恐怖にむすびつけて、実存的疎外は、市民の解体と大衆化、大戦など十九世紀後半以後の危機的状況と関連して述べられて来たが、反対に大衆、社会的現実の調和、協力の状況そのものの中にも、その根拠として不安の実存のあることが忘れられてはならない。

実存主義は人間の消極面にもたじろぐことなくふれていく現実主義ではあっても、むしろそれゆえに悲観主義ではなく、またそれを超えた明るさも、「微笑」も、「実存主義は楽観主義である」ことさえも、周知のことである。

ただ現実を日常的情意的なものにかぎるとき、人間の楽しい幸福も深刻な不幸も、いずれも不安にもとずいた体験であるのに、しばしば不幸の体験のみを不安に結びつけ、あるいはそれを不安の基盤でもあるかのように誤解する混乱も生じうるのである。それは実存の主観的抽象と同様の誤りである。そこで宗教的には信仰の冒険を、倫理的には自己を決定する、美的には幸福を追求する実存としてキェルケゴールが不安を恐怖⁷⁾と区別することによって、あるいは恐怖と関連させることによって、実存をパトス的情意的な現実にして明かにしたこと、さらにその区別は彼以後の実存的思想家によって例外なく繰返される意義をもつことに注目しなければならない。

疎外に対する姿勢に慣れると実存が機械的に語られようとする。実存は実存的に捉え、語られなければならないが、それは客体的、ロゴス的な本質と無関係でありうるということでも、又他の本質の学に対抗することでもなく、キェルケゴールの論述の過程を省いてその結論をとれば、依存しない、どうでもよい *gleichgültig* ということであったが、それは不安の上に成立していることである。

キェルケゴールのあげている不安も恐怖も、それ自体は心理的な体験である。そのような心理的なものの主体的な理解が、最近の心理学の研究においてすすめられていることが注目されるのである。このことは既に現在、人間の大衆化、疎外を哲学的に批判する段階をすまして、*経済学*⁸⁾、*社会学*、*自然科学*（特に物理学）にも主体性への反省がはじまっていることと軌を一にするものである。

もともと感性によらぬ認識のありえない反面、感性的なものによって人間が規定されてしまうというような、経験に支えられない事実を、いつまでも経験科学が前提にすることは困難である。状況をみとめることと状況に依存させてしまうこととは同じではなく、不安は恐怖と区別しうるとせねばならぬ。

客体的科学の仲間入りをあせると見えた心理学も漸く自立し、客体を絶対化しない点で実存への接近を示す⁹⁾。たとえば客体として社会があり、それに主体（個）が適応するとか、外界から刺激をうけ、それに反応する主体というような主客関係の発想を固定化することが、人間を平面的に生物化するところの一つの抽象であることを、精神医学の面から指摘されている。それのみではなく、そこには主客関係そのものにおわらない人格の概念も説かれている¹⁰⁾。また形態心理学にも表象についての図形と背景との弁証法、恒常仮定の反省、知覚と想像の相互否定¹¹⁾に基いての主体的全体的把握の可能性が指摘されている。

このような心理学にみられる事例も、疎外的人間の主体性、及び人格を配慮し、それとともに主客関係のみで認識しようとする对象的思惟の抽象性と、そ

の限界——無を意味する——の自覚を示すものである。そこには「不安」¹²⁾を主体的人間の根本的現実として見出したキェルケゴールへの接近がみとめられる¹³⁾。

さらにすすんでキェルケゴールが「不安は自由の可能性である」というように、現代の心理学もまた人間が自己自身であろうと意図するところに不安があらわれるとして、不安を主体的自由に関連させている。不安はそれを抱く本人が自分にとって本質的なものであると解するところの価値が失われようとすることによつて発生する。そして恐怖が人格の周辺にかかわるのに対して不安は人格の中樞、中心部分にかかわるともいう。このように人格の中樞、自己中心であろうとすること、自分にとって本質的なものの保持は、いずれもキェルケゴールの主体性を意味するものとみられるのである。

次にこの主体性を、客体的なものとの関係において把握する例として、主体と客体が分化し、安定した状態があり、そこでは恐怖が感じられる。そしてこの主体と客体の関係が崩壊し、主体と客体の区別が混同されるとき、安定そのものが脅かされ、無対象的な不安を感ずるといっているのである。従つて恐怖と不安の区別は主体と客体の分化に基く構造的な安定の有無にあることになる。恐怖と不安は、恐怖が明瞭な特定の危険に対する反応であつて不安は不明瞭な対象のない反応として区別されるのが最も多く見られる見解である。

従つて対象、客体の有無が恐怖と不安の区別の指標であり、その意味で恐怖の成立条件は説明されているのである。

しかしそれと不安との区別を本質的に明かにする為には不安そのものを自由との関係において説明する必要があるわけで、その点で不安に対する主体的態度の分析が重視される。それによれば、不安¹⁴⁾を忘れていた頽廢のほか、一方では、この不安に安住し、また逃避しようとする事によつて対象のない不安を、ある特定の対象に固定し恐怖に変形すること、他方には、この不安に安住せず、また逃避せず、人間的決断に立ち、新しい自己をめざして自己を超えて出る立場を見出していることである。

この二つの態度はキェルケゴールの大衆的的日常性と単独者的実存の自覚ということができる。即ち恐怖と不安に関するこれらの心理学的研究¹⁵⁾では、人間の主体性は、その主体と客体的対象とのかかわり方を問題にする主体としてとりあげられているのである。

そして不安が、恐怖にはないところの未来への予想、懸念、期待をふくむことも指摘されている。

以上の傾向には客体的思惟の限界を自覚して、既にその主体的把握の基盤を明らかにする成果がおさめられつつあるのを見ることが出来る。

こうした研究はキェルケゴールが、恐怖、不安のような感情的体験を情意性として造形し、その間にヘーゲル的な、アリストテレス以来のロゴスの把握を通して、それを離脱してパトス的なものに転ずる過程を明らかにするものである。しかし心理学の限界は非対象的な自覚によってのみ捉えられるところの自由、およびその自由に基く倫理を客体化するにとどまるところにある。思惟の対象となるのは一般的抽象的なものに限られており、我々が現に置かれている状況と、その未来の可能性との間をつなぐものには、この心理学的、对象的認識そのものを状況の中にふくむサルトルの説くような自由を欠くことはできない。

それのみでなくキェルケゴールが倫理実存の自由を媒介としてのみ宗教的実存を説き、宗教的（B）実存において人間の内在性の限界を示すものであったこと、そのために不安は人間の根源的な矛盾をあらわすことを離れては真に不安を恐怖と区別する根拠は失われてしまうのである。この意味において心理学をはじめ、内在的な学の中には恐怖と不安を本質的に区別する根拠はなく、そこではフォイエルバッハのいうように神学は心理学であって、むしろ両者は連続的なものとみなしなければならないのである。

註

1. パトス的なもの *das Pathetische*, *Philosophische Brocken* III A. s 75. von Schrempf.

キェルケゴールはデカルトについては、その幾学的精神を絶対化しなかったしるしとしての情念論に注目している。「日常的、意識的現存在での主観客

- 観の分裂がディオニュソスの陶酔によって破られ、生の日常性をこえて深淵が露呈される。」神と悪魔, 久野昭 22頁, なおソクラテスの神的憑依と呼ばれるものとディオニュソスの陶酔とは, 他者にかかわる人間構造と, 他者にかかわらぬそれとの相異がある。(二註1.) Schleiermacher 絶対依存の感情。
2. M. Scheler: 怨恨的人間 J. P. Rartre: L'être et le néant p. 85.
 3. ルカーチ・実存主義かマルクス主義か, 生松・城塚訳
 4. シモーヌ・ヴェーユ, 工場生活の経験
 5. 労働の二重性, 資本論第1巻第1章
 6. 不安について, それがシェリングから学んだものであり, またコールリッチにも見出されることを指摘している。
H. Read: Existentialism, Marxism and Anarchism.
H. Höffding: Sören Kierkegaard als Philosoph. (übersetzt von A. Dorner u. Schrempf) kap. III
 7. 不安の概念 斎藤訳 6頁
以下引用文は同書の頁数で示す
C. F. Bollnow: Existenzphilosophie 1960. S 63.
 8. 大井 正, 唯物史観における個人, 哲学 11号, 1961.
 9. 科学は事実の解明によって問を發し神学は応える Otto Rank
宗教研究 166号 91頁
心理学は主体と客体のつながりの学であるとしている。なお前項については P. Tillich の所説がよく知られている。
 10. G. W. Allport: The Individual and His Religion. I. 1959.
 11. W. Köhler: Die physischen Gestalten in Ruhe u. im stationären Zustand.
 12. 不安の用語は必ずしも統一されていないが, 次の二通りに大別できる。99頁
知られないあるものに対する不安: 無に対する不安, 死に対する不安, 罪に対する不安, 自分だけの理由でもつ不安, とうていそれを知る気にもなれないようなあるものに対する不安。 276頁—285頁
なお異常心理, 病理的不安, については実存的不安との混同を特にさけるように明かにしている。
 13. 不安の無を, あるもの(客体)と考えている心理学的考察のあることをあげて実存と区別している。 104頁
 14. 病理症状としての不安 68頁
 15. 「不安」を心理, 生物, 社会学のふれることのできない人間存在の限界を示すものと解する。
A. Kardiner: The Individual and His Society.

二

キェルケゴールは不安と恐怖を区別する重点を最もしばしば対象の有無においており、次に主体性の有無に集中している¹⁾。恐怖は客体的対象にかかわる人間の現実にくまられ、不安はそのような客体的現実にかかわる主体的人間の現実にあられる。

対象と主体性の関連を実存の各段階に即して図式的に見透すと、客体のみに注目して主体を意識しない大衆の美的段階から、客体と主体を意識し、そこで主客関係を絶対化する合理的人間は恐怖にかかわるものである。しかもそこで無を対象とし、それによって主客関係を相対化する人間は不安にかかわるものである。不安によって自由を基礎とする倫理的段階に醒め、自由の主体は絶望の挫折をへてそれを止揚する宗教(B)的段階において、主体にあられる他者へ導かれるものである。そこでまず、恐怖と不安を対象の有無によって区別することにはどんな意義があるのであろうか。

客体的な現実では、知覚から思惟の方向に高まるにしたがって、その対象性は客観性をましていくのであるが、それと反対に主体的な現実では感情が主体的方向にふかまるにつれて、その対象性は失われ、次第に対象のないものになっていくのである。対象の無とは対象に根拠のないこと、規定性のないことである²⁾。対象の無にかかわる「不安は人間における不完全性ではなく、人間は根源的であるほど不安なのである」。

不安も恐怖も主体的な感情であって、その意味においては両者を区別することはできないが、恐怖が一定の対象にだけ結びついていることは、不安が特定の対象をもたず、対象が無いのにくらべて主体的にふかまっていないことになる。恐怖にはその対象があるということは、主客関係が前提されていること、そして恐怖は一定の客体に対していだかれる情意であるから一定の状況にとらわれている。そのためにその一定の状況からそれ以外の他の状況へうつる可変的な安定のない状態である。それにくらべて不安はそのような可変的な条件に拘束されておらず、単に個々の状況ではなく、人間が人間であるかぎり必然的

な条件にかかわるもの、とりかえることも、脱出することもできない「限界状況」に基いているのである。対象のないパトスのふかさにおいてはじめて運命、原罪の意識を解くことができる。

恐怖が状況的であり、不安を状況的でないというように区別することはできないのであって、恐怖も不安もひとしく状況的であり、主客関係をはなれるものではないのである。

われわれが通常、意識と呼んでいるものはつねにすべて何物かの意識でありしたがって対象をもつ意識である。とすれば恐怖は意識の中にふくめられる。これに反して不安はそれが現実の感情であるかぎりでは状況的であって、対象をもたないかぎりでは状況的ではないといわねばならない。恐怖は意識的であるとすれば、不安は意識的であって且つ意識をこえたものである。この意識をこえる意識こそ主体性であって、キェルケゴールの倫理的実存としての自由に相当するものである。

不安のもつこのような両義性は、自由をその可能性において示すものである。

不安の両義性は彼のイロニー——（希）エイローネイアは仮装を意味する——が主観性の二乗、反省の反省³⁾であることに対応するものである。そしてそのイロニーが「すべてのものを説明するがそれ自身を説明しないという思弁」に欠ける反省をあたえるものであったように不安は主体の一つの規定としてとらえられているのである。

恐怖は人間の客体的現実として、美的段階の主客関係に、不安は人間の主体的現実として、そこから倫理・宗教的段階の主体と他者との関係に方向づけられているのである。したがって両者はいずれも主体と客体の関係を離れるものではないが、その関係の絶対化において恐怖を、相対化において不安を区別することができるのである。

そして恐怖をふくむ客体的な現実とは、主体的な現実としての不安に相即したものである。そこで主客関係を絶対化している現実とは、客体的対象にかかわる人間の現実であって、そこでは有、存在の世界における人間が対象から捉える

合理性を通してこれを支配しているのである。現代において技術，組織，経済はそのもっともすぐれたものとみられており，本質の学としていずれも主客関係における悟性的必然性にもとづくものである。

また主客関係を相対化している主体的人間の現実には，上にのべた技術，組織，経済など生の手段にもなるところの合理性そのものが客体への一つの解釈，投げ入れであることがあらわになり，現代の日常性，大衆化の根源とみられる権力意志が権力のニヒルに終るような限界の体験としてあらわれるのである。

不安はこの不可避的な限界における存在と意識の分裂としての無の体験，主客関係において捉える悟性的必然そのものが成立している偶然に醒る現実である。

すなわち **homo faber** が自己確保のために自ら作り出した合理性，科学技術が逆に人間を支配し，主体性を意味した人間理性が，技術理性として反って手段の体系となる。しかも **homo faber** は工作それ自体を超えることはできない。

所有の逆転（マルセル），恣意の逆説，**concupiscentia** にあらわれる無限の欲動は自己を保持しようとする欲動であり乍ら，反って自己を超えること，支配が支配される逆説，価値の定立が定立せざるを得ない必然性であることなどである。

これらの中でも直接に不安と恐怖の区別にかかわるのは，主体が客体をあくまで支配の対象化しようとするところの権力意志の消極面に恐怖があらわれることである。悟性を媒介として権力支配は大衆的現実において猛威をほしいままにする。そして権力意志の徹底が，いかなる見解にも絶対的真理を拒むニヒルにおちいり，ニヒルを超克する自らがニヒルにおちいることにおいて不安であることである。

現実的な個としての権力意志を肯定して恐怖を排除することによって逆に権力意志の挫折を実証し，不安を見出すのである。そしてこのことはケルケゴールの恐怖において不安をみるところの排泄 **elimination**⁴⁾ の一環であ

って、不安と恐怖は分離され、あるいは並列される二つの事実ではないのである。

「現実的なものは理性的である」とするヘーゲルの合理性が、合理的なるが故に現実即ち即してあり、しかもその現実はその中にきわめつくされることのないものを含むところの、限りなく豊富な無限者である。われわれの理性、客体的思惟はこの現実性を客体化し、捉える一つの立脚点にすぎず、「無限の公開性」といわれる理性による現実の把握、また悟性の合理性、あるいは自然に答えさせる手続きを欠かぬ実験といっても、それはニーチエのいう *perspective* に相当し、それはまた現実そのものの豊富な内容の一部分を切りとって抽象することでもあるとみなければならない。

意識と存在、キリスト教精神と世俗精神をヘーゲルが合一させたことに対して、その総合の観念論的逸脱を指摘した基盤は、不安の体験であった。とりわけ、その体系の完結性に対して、不安はその両義性によって理性の絶対化を否定するものであり、「不安は体系のヘーゲルとわかれる根本的特徴であり」、ヘーゲルの絶対否定 *absolute Negativität* としての無が、キェルケゴールの実存の根本規定である不安の対象である。

無の把握をめぐる、ロゴス的なものに対してパトス的なもの、理性にかえて不安をあげることは、主体の相互否定をみとめあうべき理性そのものの技術化、悟性化への批判があり、それによって理性に失われる自由、主体性を不安に見出そうとするものである。

通常いわれるように不安がヘーゲルの理性にかわるものであるにしても、理性に対する感性の優位を意味するものではなく、また不安も恐怖も実存を現実に示す表現であるかぎり、五節にもふれるように表現としてふさわしく直接経験から造形された情意性である。恐怖には欠けており、不安にそなわるところの両義性は、同感的反感といわれるものであって、理性の絶対化の否定である。

周知のように理性の体系の完結性、絶対化がまずあって、その否定として情意性をあげたことが不安の動機であったとしても、さらに本質的には、不安を

ふくむパトスについてはケルケゴールは、他者に結びつく限りでは、理性 *raison* は心情 *coeur* そのものとひとつであるとみたパスカルのように⁵⁾ 情意性によってロゴス的な理性を補い、それによって具体的な全人的把握を意図していたと解される。

「合理性の正しいという根拠は合理性の中にはない」のであって、悟性が一視点であるのみでなく、ケルケゴールにおいては理性も、単独者的実存そのものも一視点である。そしてそのような内在的人間の限界とその超克の予感「不安」として示されるのである。

恐怖は反省が加わることによって解消されうるもの、相対的なものである。合理性はその手順としては技術となりうるものである。しかもその技術は恐怖を解消する技術であると共に、また新しい、別の恐怖を生む技術でもあるというそのこと自身が不安として体験されるものである。

つまりそのような過程にたずさわることを通して技術の主体は、主体そのものを支配できるものではないという意味でその主体にあらわれる無にかかわる不安を体験し、不安はそのような無にふれることのない恐怖とは別のものであることを自ら明かにする。

したがって生存の機械化、組織化、技術——共産主義も含めて——の進歩は人間にとって機械がオルテガのいう第二の自然になり、その上、たとえそれらは恐怖の解消にいたりうるものであっても、それは不安の解消とは関係がない。恐怖の解決の過程の中ではその姿を見せない不安が、恐怖を通して働きかけてくるかぎり恐怖と置きかえられるのも理由のないことではない。しかし不安は生存の機械化、技術化の際限なく進められること自体の中に、なお目的のない無限の進歩として、実証主義を装う理想主義のニヒリズムの可能性を予感しているものである。不安はそのような無限にかかわるものである。従って「不安は自由との関係においてのみ語られるのであり」逆に実証主義⁶⁾ のめざましい成果にもかかわらず有限性は「不安」だけは示すことができない。そして「不安を正しく抱くことを学んだものは、最高のことを学んだのである。」

註

1. 死にいたる病, 松浪訳, 173頁, 181頁,
客体, 主体を他者によって関係づける構想について, ソクラテスが, 無知一知を他者(神霊)によって自覚するに至ったとしている。(不安の概念)
ソクラテスの精霊憑依, E. Kretschmer: Genial Menschen.
2. 252頁,
デカルトは「高邁な心」をその情念論 *Les Passions de l'Âme* 1649 であつかい, 伝統的に混濁, 即自的なものと解されて来た情念は, 方法的に研究できる一つの事実として *cogito* の図式につくされない全人性を旨ざしてその意義を再発見しようと企てている。
3. 反省の天才, 本学紀要 第3号, 第4号
4. 排泄 *elimination*
The Point of View, by W. Lowrie, Oxford P. 73.
5. パスカル宗教論における理性の位置づけ。宗教研究, 166号, 75頁。
6. 実証主義はひとつの状況, 対象について不安を否定する。そのことはそれ以外の状況の否定として, そこにあらわれている無に対応する不安をあらわすものとみることが出来る。